

矢板の旅

やいタビ

第2弾「ツツジ旅」も大盛況でした。



ツツジの前で歓声が！

「やいタビ」に続き、アーが六月十日(日)に行われました。

八方ヶ原のツツジは有名ですが、さらに多くの人に訪れてもらおうと「ツツジの矢板」を宣伝しました。

やはり多かった女性の参加者 男性十人の参加者に比べて三倍以上の三十七人の女性が参加しました。市内は十六人、市外は三十一人です。

日光市今市から参加の母娘と娘さんの友達三人連れ。市内の仲良し四人グループ。那須塩原市から参加のご夫婦などさまざまでしたが、お話を聞くと、こういうイベントには積極的に参加している方がばかりで元気いっぱいでした。七十代の方達も多く、全員十歳は若く見えました。観光ボランティアの

皆様、ありがとうございます。行き帰りの車内では観光ボランティアの方

が、プロのガイドとは一味違った、栃木なまりのある親しみのわく口調で、八方ヶ原や觀光リンゴ園、温泉などの矢板市内の案内や、秋の花火大会、ともな祭りなど矢板の行事を紹介しました。また、現地では、ヤマツツジは、少し遅かった気がしましたが、ハイキングをしながら、ハルリンドウ、チゴユリ、ウマノアシガタなど、山野草の名前を教えてくださいました。

ミニスイスを歩く このコースは緑の中の牧場で、「ミニスイスのよだね」と言う人もいて、まさしく、そんな風景に、そばにいた人た



三世代で楽しく歩くグループも

ちもうなずいていました。コースは二つ 参加者の九割は平坦コース(山の駅から出発して八方牧場周辺をめぐるコース)に参加しました。大間々のレンゲツツジコースに参加した人たちは車で駐車場まで行き、降りてくるだけなので、花を見ながら楽なコースだったと聞きました。

ほかの市町村にもさまざまなツアーの催しがあり、今回の参加者の中には、それらにも参加している人が数多くいました。矢板でもこのやいタビをさらに充実させて季節に応じた催しを企画すれば参加者がますます増えると思います。(K・H)

【矢板の誇り】おらがまちの芸術家

温かいふだん着というイメージの編み物を、デザイン、素材、技法の改革でフォーマルな場所でも着られる高級服に仕上げ、その地位を高めることに成功。また曼陀羅というブランドを立ち上げ、東京にも進出。一本の糸と闘い、独自の高級注文服のブランドを築いたあみもの創芸家吉成忠晃さん(77歳)に話を聞いた。

豊かさ・温かさ・柔らかさを織り込む曼陀羅の世界

吉成忠晃(ただあき)さん(本町)

加価値をつけてこういう作品を創りたいと思うた。ヨーロッパ九カ国を三週間回ったのも栄養になった。武蔵野美大の通信教育も受講。そこでビジュアルデザインは単純明快がもつとも大切と学び、目からウロコ。さらに腕を磨く手段としてニット

の全国コンクールへ教室の作品を出品。あちこちのコンクールで総理大臣賞をはじめ数々の受賞に輝いた。きつい一言が着るための服作りへ 立体裁断の第一人者原のぶ子先生との出会いが転機となった。受賞した作品をみせても「着たいとは思わない」と言われ立体裁断の勉強を始めた。見る服でなく着るための服作り。一本の糸から仕上げ

独自の作風を編み出すためのこだわり そんな時、加藤唐九郎の抹茶茶碗を見る機会があった。何百万円もしたという。編み物にも付



ていくニットでは、立体裁断の手法は難しかったが、流れるラインと着心地の良さは確かに素晴らしい。そのうち「世界に通用する服になつてきたね」先生からそんな言葉が頂

けるようになった。迷いつまづいた時は自然に接して癒された。「私は自然崇拝者なんですよ」と吉成氏。川のせせらぎや竹の葉の擦れる音を聞き、野菊や高原山を眺めながら、住むのは都会よ



数々の作品の中から

り矢板がいいと言う。仕事を通して社会貢献ができれば・・・

かつて編み物学校を運営し、五千人を指導したが創作に専念するため平成五年に閉校。それ以来自分の技法は門外不出としてきたが、最後の仕事として自分の技術のすべてを伝えたいと平成二十一年教室を再開した。(二目ゴムの編み出し方や織り地編みなどの独自の技法がある)これから

の夢は、手編みで曼陀羅のタペストリーを創ること。最後に古民家の「お試しの家」をギャラリーとして開放してはと市に提言。(R・K)

編集後記

市内の地域公園8カ所を見て回った。雑草が生え、樹木や砂場の入れなどが行き届かないところが多くみられた。子どもたちが安心して遊べる環境にするにはどうしたらいいのか。「子育て環境日本一を目指す」ためには市と市民の協働が不可欠だと強く思った。